



全册九册十月十五日起发行每册一册百四十册 十五册



目次

一、	三、	四、	三、	十三、
夢物語	佛陀の鉢相	廣饒益衆生	九月十二日龍口御法難會に就て	日什置文諷誦章卷上 素人問答(本尊) 公開狀 教學財團に就て 雜報數件

今成乾隨	今成乾隨	今成乾隨	今成乾隨	今成乾隨
山根顯道	山根顯道	山根顯道	山根顯道	山根顯道
侍者宏道筆受	侍者宏道筆受	侍者宏道筆受	侍者宏道筆受	侍者宏道筆受
坂本日植	坂本日植	坂本日植	坂本日植	坂本日植
六或學人	六或學人	六或學人	六或學人	六或學人
古定不新	古定不新	古定不新	古定不新	古定不新
釋天順	釋天順	釋天順	釋天順	釋天順

一、發心 3 實在
夢物語

今成乾隨

夢と云ふものはつまらぬ事の多いものであるが、併し夢を見た本人に取つては、非常に苦痛を感ずることもあれば、又極めて愉快なこともある夢の事を話すと、聞く人に取りては、馬鹿らしく思ふとは多いけれども、語る人に取りては、誠に真面目なことがある、昔から痴人夢を語ると云ふて、夢物語をすれば直に人に笑はれるのである、さは言へ、昔から夢て真理を發見し、夢に妙句を得たと云ふ人もあるから、一概に馬鹿にした譯でもなからう、殊に真面目なる夢は、意識の奥底に潜んで居つた觀念が、他の障礙物の排除せられた場合に、突如として現れて來ることもある果してさる夢とすれば、其意味は時に或は覺者の音聲としての響があるであらうと思ふ。

(1) 醒つて吾等凡夫の境遇を顧みれば、不完全なる智識であつて、五里霧中に彷徨して居るのであるから、其状態は夢と違つた所はない様に思ふ、若し強ひて其差違を言へば、夢は短時間て醒めるし、迷は殆ど永久に相續して容易に悟れないの別であらうと思ふ、人生總て是れ夢ではあるまいか、迷へるものが夢を笑ふのは、五十歩百歩であらうと思ふ、殊に其夢が

迷を轉せしむる聖者の聲であつたなら、夢は其儘悟りの投である、予は今夢物語を爲すに就て、笑ふ者を誡め、世の迷者をして豁然開悟せしめんが爲に前置を述べたから、是より夢を見るに至つた因縁を述べ、進んで夢物語に移らうと思ふ予は始め神秘的信仰に因て、出家沙門の身となつたのである妙法蓮華經を受持すれば、學ばざるも智者となり、勞せざるも富者となり、病めるものも健康となり、何事をも其原因を修せずして結果を得るものであるとの信念があつたのである而も其意味は教理上謂ふ所の信仰の内容に就て言ふのでなく全く無因有果の外道の有様と違はるのである、爾後佛敎理經典等の研究に従事し幾分の智解を發すると同時に、曩の神秘的信仰は殆ど破却せられ、深遠なる教義に接するや、益す了解に苦しみ、煩悶に煩悶を累ね、苦痛に苦痛を積み、偶々了解することがあつても、智識の欲求に一時の満足と與へたに止まり、何の必要ありて斯の如き法門を説かれしやの疑を存し、居つたのである、唯徒らに思索に耽りて、一の概念を認識したに過ぎないのである、語を代へて之を言へば、教義研究として會得することがあつても、精神上何等の光明を認むるとなく、從て自分ば説法敎化の場合に於ても、議論に馳せて、何等の感化を與へしやは頗る疑問である、斯の如き有機であるから、何も知らぬ神秘的信仰の當時こそ、羨しく思はれる、さりとて今更迷信の状態に立飯るとも理性の許さず

る所であつて、進退維谷まる譯である。予は之が爲に煩悶懊惱し頭痛を感じない日はなかつたのである。然るに本月八日午前三時、不思議なる夢を見て、此煩悶懊惱は却て一場の夢と化し精神爽快に何とも形容の出来ぬ歡喜を以て満され、今猶聖者の聲として雷の如くに震ふて居るのである。故に予はこの歡喜を分たんが爲に、夢物語をするのである。

予は煩悶の夢に苦しみ、時に天涯聲あり、汝何をか煩悶する。如來の説法は唯煩悶を治するにあり、然るに汝如來の説法を學んで、却て煩悶を累ぬるは、之の實に如來設化の本旨を知らざるの致す所なり、汝煩悶の苦境を解脱せんと欲せば、如來の説法は唯偏に煩悶を治するにありとを信せよ、予此語を耳にし、豁然悟る所あり、頭を揚ぐれば微妙の相好を具せる聖者、慈眼を以て吾を見給へり、吾拜跪せんと欲して忽焉として夢醒む、之が爲に積年の疑問換然氷釋せり

と言ふ有様である、譬へば病人が病を愈す爲に、藥の講釋に心を奪はれ、遂に藥を飲むのを忘れて病苦を増すやうな有様である、ところが醫士より御前は病人ではないか、此藥は病を愈す爲に必要である、然るを藥の講釋で夢中になるとは愚の至りである叱咤された様な譯である、如來は良醫の如く、妙法は良藥の如く、吾等は病人の如くである、如來は吾等の煩悶を治せんが爲に妙法を附與せられたのである、吾等

である、而も自己の發展が多方面であるから、從て障礙物も多角的である、若し自己で觀念が空無に歸すると出来たならば、自己の發展を試みるの必要がないから、一切の煩悶が生起しない譯である(淺薄なる意義に於て)佛教の小乘教は、隨に此方面に向て居るのである、極端なる禁欲主義であつて、其究極する所、灰身滅智と云ふ如き消極的解釋を試みたのは、即ちそれである、此空無寂滅主義は、或意味に於て煩惱を對治し、惡業を禁止することが出来るから、一應は有益なる教訓のやうに思はる、けれども、決して之れを以て満足することが出来ないものである、斯の如き思想は生ける吾人の生命を殊更に殺すやうな譯で、畢竟徒勞に屬するのである何故と云ふに、萬有の存在を非認し、吾が心身を分析して、空と觀じ無我と云ふも、皆是吾人の思想界に生死する一波瀾に過ぎないのである、自己ありと云ふも自己にして、自己なしと云ふも自己である、空と觀じ無我と云ふも心鏡に映る現象に過ぎないのである、故に自己の存在てふ事は自明の理であつて、何等の證明をも要しないのである、自己が自己の存在を證明するは非論理なりと云ふものあらば、自分の眼で自分の眼を見ることが出来ないから、自分は盲目であると云ふと一般、愚論の甚だしきものと云はねばならぬ、自分の眼で自分の眼を見ることが出来ないにしても、自分の眼に萬象の映る所が盲目でない證據と思ふ、其如く自己の存在は時間を

は余念なく唯南無妙法蓮華經と信念口唱すれば、其處に大安心が確立せらるゝのである、祖師が御妙判に「末法に入りヌレバ餘經モ法華經、詮ナシ只南無妙法蓮華經ナルベシ」如來は「是は好良樂、今留在此汝可取服勿憂不差不差」と仰せられたのは、徒らに思索に耽りて如來教化の本旨を没却せられたとの思召である、承陽大師が「迷ふ時は法華に轉せられ悟る時は法華を轉す」と迷ふ時とは思索に耽る場合であつて悟る時とは如來設化の本旨を了する時と見て支障ないと思ふ予は此の夢中に感したる心を以て經典を見るに、菴羅果を取て掌中に探るか如き想がするのである、いざ是より佛教教義に關し其一般を解決して見やうと思ふ

抑吾人人生の状態を達觀するに、煩惱、業、苦の三道は連鎖展轉して旋火輪の如く、其始終を見ることが出来ない様であるけれども、煩惱あるが故に惡業を作り、從て苦痛の境界に彷徨するのである、故に業苦を除かんとするには煩惱を斷つべきである、煩惱は原因であつて業苦は結果である、然れば煩惱とは如何なるものであるか、又其數何程であるかと云ふに、其數無限ないけれども其根本を探れば唯一つである、即ち吾人人類は老若男女賢愚利鈍を問はず、自己生存の努力と云ふ傾向を有して居る、而も自分の發展の欲求は、縦にも横にも擴充して行くのである、其度合は際限ない譯である、其處で此發展を障礙せらるゝ場合に於て始めて煩惱が起るの貫き空間に亘りて、其現象及關係等が投影する所に於て、自己の存在を認識することが出来るではないか、既に自己の存在を認識し、生々活潑の努力が必然的に生起するものに向て、無我主義に安んずるのは、恰も自分の眼を潰して盲目となり、不具者は幸なりと謳歌する徒輩であつて、誠に憫然の次第である、若し一度此空見に沈没し、永却出づる期がなかつたならば、吾人の此世に生れたる本義と背馳し、度し難きの者輩である、佛在世の當時消極的方便説に拘泥したるものに對して、如來は如何なる罪惡を冒し、惡道に墮するも空見に墮せざれ、惡道に墮するものは救済の道あるも、空見に墮するものは、救済の道なく、消極的涅槃に満足するものは、煎りたる種の更び芽の生へざる如く、積極的涅槃に向上するの不可能なるを説破せられたのである、之を要するに佛陀は自己生存の努力を害用するの弊を矯正する一時的方便に過ぎないのである

自己生存の努力の場合に障礙をなすものは、千差萬別であるが、其根本を言へば生死無常の障礙である、「御前百迄わしや九十九まで俱に白髮の生へる迄」と云ふた所が、それは青春男女の比較的希冀で、幾千萬年生きて居たからとて矢張り満足は出来ないものである、吾人生存の希望としては常住不滅の境界を欲するのである、常に常住を欲求するに止まらず、十方法界に遍滿せんと欲するのである、而も此縱橫無盡の主躰

の内容に於て、純潔快樂自在等の一切の欲求が附帯して居るのである、斯の如き欲求は一見空想に過ぎない様であるけれども、之れが即ち先天内容の聲であつて、吾人が一大光明を發射すべき導火線である

印度降誕の悉達太子の發心も、それと同一である、國王の太子として生れ、人生の榮華を極めたるも、生死無常の爲に煩悶懊惱し、此苦境を解脱せんが爲に、遂に出家沙門の身となり、大悟徹底し給ひた譯である、彼の秦の始皇が不死の薬を求めたのを、世人は笑ふけれども、予は同情に堪へないのである。

佛陀は如何にして生死を解脱し、常住の涅槃に体達せられたかと云ふに、自己即ち久遠常住周遍法界の本佛なりと自覺せられたのである、之が即ち佛陀の顯本である、自己の顯本と同時に既往の年紀大小の覺者、十方應現の佛陀は唯一本佛の慈悲的活動の應現となるのである、三世十方の活動應現は、自己生存の努力の積極的實現である、更に之を言へば本佛果上の不思議の妙用が、悉達太子の煩悶の内容に投影し、煩悶其儘を純善提化し、人生問題に(生死無常等)煩悶せるは一場の迷夢に過ぎない事を自覺せられたのである、生死畢竟何ものぞ、常住なる本佛の妙用に過ぎないのである、此本佛は一面人格的であつて、一面は實相的である、此人格的と實相的とは、互具すると云はんよりは、寧ろ有相莊嚴微妙の本佛が

て、夢の方面に向はしむるは元品の無明であつて、千萬無量の煩惱を續起せしむるのである、自己生存の努力をして本佛果上の淨用とするは妙法である、此妙法は生死の長夜を照す大燈明であつて、元品の無明を切るの大利剣である、斯の如きの信仰に因り達觀し來れば、一も煩悶する必要はないのである

予は既往十數年、如來設化の妙用を知らず、淺薄なる智解を以て、大乘妙典を論議せんとせしは、其本末を顛倒したのである、今や夢に本佛の慈音に接し、積年の苦惱一時に消散し安樂地に住するを得たり、幾億萬劫の思索は一夕の夢に如かず、如來の設化は煩悶を愈するにあり、煩悶の大なるものを生死問題とす、之を解決する他なし、唯

南無妙法蓮華經と 信念口唱するあるのみ

聖 語

但在家の御身は餘念もなく日夜朝夕南無妙法蓮華經と唱へ候て最後臨終の時を見させ給へ妙覺の山に走り登り四方を御覽せよ法界寂光土にして瑠璃を以て地とし金繩を以て八の道をさかひ天より四種の花ふり虚空に音樂聞え諸佛菩薩は皆常樂我淨の風にそよめ給へば我等必ず其數に列ならん法華經はかゝるいみじき御經にておはしまいらせ候

其儘宇宙の各方面に一大妙用を活現し給ふ、其處に實相と云ふ意義が含まれて居る、本宗に於て歴史の釋尊に即して教理的本佛なりと顯本する妙義は、眞に味ふべきとである、雲霧を排して天月を見るの感がするのである、自己發現の状態は、如何にも煩悩的であるが、此煩悩こそ即ち菩提に達すべき動機となるのである、此自己生存の努力でふ觀念が、自己の主体に屬する本佛果上の夢である、此場合は本佛の名稱なきも果上に約して暫くしか呼ぶなり、吾人に存在する本佛は煩悩の夢の爲に容易に覺醒しないのである、けれども客体にまします顯本の佛が、常に淨土に住し説法教化して煩悩の夢を破り、自己主体の本佛と握手せんとし給ひつゝ、あのである其説法は即ち南無妙法蓮華經である、吾等此妙法を受持する時に於て、客体の本佛と主体の本佛と感應道交するのである、佛の魂の吾に入り代らせ給はねは稱へ難き題目なりとは、此間の消息を道破したのである、妙法を信ずる時、本佛が常住に説法し給ふ事を感知するのである、經に一心欲見佛不三自惜一身命一時我及衆僧俱出靈鷲山と説く、即ち之れである之と同時に自己主体の本佛も顯現し給ふのである、信念此處に至れば自己生存の努力により欲求せる煩悩は悉く善提化し本佛の淨用となるのである、事茲に至れば煩悩として斷すへさものあらんや、嗚呼實に顯本の妙教は、具存一体の妙法にして、古今東西に比類なき宗教である、自己生存の努力をし

四、佛陀篇 鉢相

笹川真應

一 佛陀の鉢相を筆に現はすは容易でなり

美術家が其作品に對する苦心經營は、非常なもので今更吾人が、喋喋するまでもない、讀者の知る所であるが、一例を擧げて話をすれば、元祿時代に江戸に横谷宗眠といへる、彫師がありましたが、數ある弟子のなかに、何某といへる青年がある、此者こそ宗眠の衣鉢を継ぐべきものであると、宗眠は心の中に認識してある、ある時その青年が虎を彫り、意氣揚々として謂へらく、この虎は生々として居る、師匠宗眠に鑑識たら、自己の棟腕に感伏するであらう、悦び與るであらうと、得得然として宗眠の前に出ました、すると宗眠は悦ぶ所か、その虎を擲つけ眼には涙をただねて、弟子に引導をわたした、

この虎は死んでおる、彫師として斯る作品をなすは大に愧る所である、汝は今日限り破門をする、大和國に有名の彫師がある、その人に就てこの虎を生かして來い、この虎を生かすことが、出來たならば、破門を許してやると、意外の立腹に、弟子も止なく宗眠の許を辭して、大和へと發足をした道すがら師匠が情をこめし、意見を深く心にし、如何なる艱

難困苦に遭遇するも、成功を天地に誓ひしが、不幸にもその第二の師匠と仰ぐ人を、尋ねて行とその人は早や、故人となりけると聞き、痛く力を殫し、其より諸方を彷彿さ紀伊國へ流れて行き、熊野の旅亭に逗留しておるとこの旅亭の主人が彫物品の鑑定家であつて、その虎を視てこの虎は死であるといふに自己も大に覺り、それよりその旅亭の主人を便に、大に督勵し、大に精練して、終に成功したといふ立志談があります。佛陀の躰相も、これと同じくその神髓を發揮せんとするは蓋し容易でない、

二 皮相の佛陀觀は死だ虎である

茲に書師が有りましたして、筆を佛書に染ると、假定せんに、その書師が佛書に對する感想は、如何でありませう、この想は佛書着筆の原動力となり、描きし佛書の價値に、至大の影響を呼び起すことになる、皮相の佛陀觀も、これと同じくその本質を發揮することは出来にくい、これは實に佛教における、重大なる問題である、而して何をか、皮相の佛陀觀であるやといふに、佛の身は金色にして、百福を以て相を莊嚴するといひ、佛には三十二相があると、彫物師も書師もこれを標本として、成功を期すと同じく、佛敎諸宗の人も佛陀に對する感想は、極極幼稚なもので、本佛述佛の關係は知らずただ、佛の木像佛の畫像に、對すれば何れも同一のもので、何れも利益あるものと、誤解しておる人が多く見受られます

て、あるから、ヤレ觀音であるの、ヤレ藥師であるの、ヤレ歡喜天であるといふ様に、その信仰が雜炊的になる、妙しく教義上の見地を以ておる念佛門の人や真言宗の人の如きも、阿彌陀や大日を崇拜して、自餘の諸佛を輕んずる輩も又佛陀の躰相は、如何なるものなるかとの、間に對しては、百福莊嚴である三十二相であると、答ふるの外完全に、佛陀の躰相を顯現することが出来ません、

三 如何なる理由により爾く皮相の

見解にあるやといふに、彼等は決して皮相の佛陀觀にあらざ、我こそは超越したる佛陀觀を認識し、これを已に世間に主張してゐると、いふであらう、されど彼等は、彼等の奉ずる教典に憑て、彌陀中心の佛陀論を主張したり、大日中心の佛陀觀を主張する以上は、彼等は到底俱に佛陀を語るの、資格ない者といふの外なく、從て佛陀の躰相を顯彰することが出来ないうであります、佛陀一代五十年の說法に於ては、時と場合によりて、身相を莊嚴せられておる、殊に始覺の佛(爾門)本覺の佛(門)本佛(釋)述佛(佛)等(佛)の違目が明瞭であり、一月萬影天月水月の譬の如き、洵に結構なる比例がある、

一月……萬影

天月……水月

阿彌陀大日等述佛

斯の如き比例の文證は、法華經に説せられて、釋迦一代における、佛陀觀の妙境は法華經に終極いたしてあります、妙音菩薩や觀世音菩薩の如き、衆生濟度のためには、三十三身を現し三十四身の變化を示しておる、況して十力無畏の大神通を有する、佛陀が說法のためには、一月萬影のその如くに、身相を變現せられたるは、當然の事であると思ひます、念佛門の人や真言の人の如き、その一部の變現を見て直に彌陀中心を主張したり、大日中心を主張するは、即ち皮相の觀察で、如何に筆を飾り如何に言を弄して、阿彌陀や大日を稱讃するも、死んだ虎と同じく、相は佛に類するも、その體質を發揮することは出来ません、即ち彌陀や大日は、有爲の報佛夢中の權果で、釋迦牟尼佛は無作の三身覺前の實佛であるといふ、佛敎大師の佛陀觀に對する斷案を轉用して、彼等の憑む佛は、夢中の權果夢に實を得たと同じく、醒めて呆然自失の型である即ち名のみありて體なく、假に體あるとするも當體の自用なき、所謂死んだ虎を描き死んだ虎を彫ると同一なる話であります

四 果して然らば眞正の佛陀觀とは

如何にといふに、印度に應現したる歴史の釋迦は即ち教理的の釋迦で、無始無終實在の佛陀である、尙委しくいへば應身の釋迦は法身報身の智徳を具備し體用圓滿にして、常住不滅である、佛陀は則ち事常住にして、應身を本となすこれ

應現の釋迦はその本地を顯はしたるものが、法華經壽量品の説相で、これを顯本したる眞正の佛陀觀であります、日蓮大聖人の仰にいわく、

「夫れ始め寂滅道場華藏世界より、沙羅林に終るまで五十年の間、華藏密嚴三變四見等の三十四土は皆成劫の上の無常の土變化する所の方便實報寂光安養淨瑠璃密嚴等の土なり、能變の教主涅槃に入ば所變の諸佛隨て滅盡す、土も又以て是の如し、今本時の娑婆世界は三災を離れ、四劫を出たる常住の淨土なり、佛既に過去にも滅せず未來にも生ぜず所化以て同體なり」と

この御妙判によれば、能變の教主釋尊涅槃に入り給へば阿彌陀藥師大日等所變の諸佛は隨て滅盡すとあり、また、顯本したる娑婆世界を常住の淨土とするは、本佛釋迦牟尼佛常住不滅なるに、基くものと會得せられて、本佛中心の佛陀觀を眞正にして、佛敎教義上法華經に於て發展したる、最高の佛陀觀なりと斷定せられよ、而して、斯の妙味を感得するにあらざれば、從て佛陀の躰相も、遺憾なく發揮することは、覺えないと信じます、

五 されば佛陀の躰相は如何にと

云ふに上來述べた通り、佛陀觀を明にするにあらざれば、完全に佛陀の躰相を心に映すことが出来ない無量義經に佛陀の躰相は、委しく列記してある、その終に左の如くあります

「佛陀は三十二の相あり、八十種好見るべきに似たり、しかも實には相非相の色なし、一切有相眼の對絶せる所、無相の相にして有相の身なり」と

示されてあるが、此經文を拜讀すると、佛陀は實に相非相の色わけなく、一切の有相は對絶といつて比較すべきものはなく、無相の相にして有相の身なりとは實に、躰相を論ずる適切な引證で、吾人が前段逐次述べたる所に對照せられたなら、佛陀の躰相は、輕輕しく外部のみ、論ずるの不當なることも、明白になり各宗共通の如く、思惟せられつゝある、木像畫像にも各宗奉ずる經典の淺深に依て佛陀の躰相にも、優劣あることも讀者は印證せられたならん、日蓮大聖人はこれに就て、痛快なる斷定が下されてある、

「佛に三十二相あり皆これ色法なり、最下の千福輪より終り無見頂相に至るまで三十一相は、可見有對色なれば書くべし作るべし、梵音聲の一相は不可見無對色なれば書くべからず作るべからず、佛滅後には木畫の二像あり、これ三十一相にして梵音聲なし、また心法かけたり故に佛にあらざ、生身の佛と木畫の二像を對するに、天地雲泥なりなんぞ涅槃の後分に、生身の佛と滅後の木畫の二像と、功德齊等なりといふや、また、瓔珞經には木畫の二像は生身の佛に劣れりと説く、然りと雖ども木畫の二像の前に經を置けば三十二相を具足するなり」と

この御文意は完全に、佛陀觀を體認するにあらざれば佛陀の躰相を現實する能はずといふ、聖意でありますさらに、この聖意を細に説明すれば、左の意義になる

三十一相は見ることも、出來れば識別もつくこれを、可見有對色といふ、梵音聲は見ることもできなければ比較すべきものもない、これを不可見無對色といふ、佛滅後には木像畫像はあれども、梵音聲とし佛の心法がかけてある、されば生身佛と木畫の像と較べてみれば、その違目は天地の如く大なる相異である、また、木像畫像は生身の佛に劣るといふが、木畫の二像のまへに、經を置けば、三十二相を具足することになる、而して、この結文は意を留めて、拜讀しなければならぬ、これ吾人が、皮相の佛陀觀によれば、死んだ虎を彫ると、同じく完全に佛陀の躰相を實現することが、できないといふ理由も、この御文意に基因するのである、されば木像畫像も生身佛の躰相とよなしく、その經典の優劣によりて、功用の優劣あることは一目瞭然たることになり、されば本佛は事常住にして、その我即是父の柔軟の御像は、永久に法華信仰の我佛の前に示現せられて、居るにも拘らず、これを見奉ることのできないのは、終生の一大恨事なれば生身佛の躰相は、實在にして盡未來際不滅なることを感想せられたし。

六 何故に佛陀の實在を

三 佛陀篇 智慧

廣饒益衆生

山根 顯道

又手はや月日の經つのは早ひもので、秋冬春夏と夢の裡に一年を過しまして、又もや宗祖の入滅會に再會ました次第で、御參詣の方々報恩の唱題修行、まことにさうも殊勝の事で御座る

體認する能はざるかと謂ふに、これ、幽冥を異にし現象界にのみ着目して、その現象の根源たる實體界を認識するの力のないのと、煩惱のために心靈界は曇てその心鏡に、佛陀の躰相が映らないのである、かく論ずると佛陀の躰相を、主觀的に認識するが如き傾きになるけれども、事實は決して一方に偏するものでなく互に、融合するものである、これを感應道交といひます、井上哲次郎博士の如きは、人格的實在萬有的實在を否定し、倫理的實在を主張し、將來の宗教は倫理的實在ならざるべからずと、謂はれるけれども、これ決して完全したる、主張と認められない、吾人はこれに對し後日論評を下すが、いま茲には佛陀に關する點に就て述べんに、井上博士の所論を分析するに、人格的實在と萬有的實在とは、客觀的になり、倫理的實在は主觀的になります、佛陀の實在を吾人の一念に映すは、倫理的實在則ち主觀的になる、而して佛陀の躰相は、主觀的のみに見るべきものでないと、吾人は信じて居る、さらに、井上博士の所論を専門的に解釋すれば、人格的實在(佛)萬有的實在(法)倫理的實在(僧)かくの如き配合になる、倫理的實在を認むるならば、人格的實在も萬有的實在も認識しなければならぬ、佛法僧は常住不滅であるといふことになる、以上述べたる所により讀者は、佛陀の躰相は永久實在であることを體認せられ、この永久の實在は法華經顯本の教功であることも同時に認識せられよ

で、今日の説教は、佛陀の智慧と云ふ事を少し計り紹介したいと思ふのでありますが、元來佛陀の御智慧は、權實二智の運用到らぬ限もなく、藥草品には「種々の言辭をもつて一法を演説し給ふこと佛の智慧に於て海の一滴の如し」と説かれ自我憐には「慧光照すること無量なり」とありまして、その御智慧の廣大無邊なること、とても自分共凡慮の測り知るべからざる境界であります、而もその御智慧の發作は常に、苦を抜て樂を與へやう、迷を轉じて悟を開かしめやうと、吾人凡夫に對する大慈大悲の御心の底より進み出づるのであつて、智慧の裏には慈悲……慈悲の裏には智慧と、兩々相倚りて饒益衆生の妙用を御施しになるので、之をば悲智相即の法門と申すのである、それを今日談話したいのだが、何しろ貧賤が貧賤ですから、ほんの千萬億分の一端を演るに過ぎないと、豫め御承知を願ひたい、殊に今日は御婦人方が多く見受

られまして、極々お分り易い處の因縁談を説くことに致しましやう、

往昔釋迦如來御在世の時分の事ですが、天竺迦毗羅衛國と云ふ國に難陀と云ふ人があつた、此難陀と云ふ人實には釋迦如來の肉縁の舍弟であつて、其夫人即ち女房の名を孫陀利女と申しまして、誠國中で一二を争ふ美人である、开處て御舎兄の釋迦如來は成佛遊ばしたが、難陀太子は夫人の色香に迷ふて滅多に悟を開く風情も見へない、それを釋尊いよ／＼不便に思召して、一時阿難尊者を御供に連れて城中へ托鉢に御出になる、托鉢と云へばどうか薄穢い乞食坊主の様だが、今時の托鉢とは心持が天地雲泥の相違、欲の爲に托鉢をするのではない、衆生に布施の功德を取らせ様が爲、若し善心を以て如來に一箸の食物なりと御供養申す者があれば、其功德測るべからず、それ徳勝童子は土の餅を御供養申して阿育大王と生れ、稗の餅を進せた人は阿那律と云ふ聖者と生れたり然れば今時欲の爲我身の爲に乞食的托鉢をするとは雲泥の相違である、

さて教主釋迦如來舍弟の難陀を御教化なさるべく阿難尊者唯一人を御召連れ、悉くも難陀太子の門口に立て托鉢をなさる折節難陀は妻の孫陀利と共に化粧をして居ましたが、如來が御自身と御出掛、是は予が直接に出て何が捧げずはなるまいと、狼狽もつて座を立ちますと女房の孫陀利の云ひ様がイ

御前は一寸も此處を離すことは成ませんが、如來の御出なら是非がない、此化粧の濟ない内に早く片付けて御座れ、片時も側を離れてはならんと云ふた、なんと嫉妬深い妻ではあるまいか、

難陀は早々玄關へ出まして釋尊に御禮を申上げ、さて御手の上の鉢を取て暫時是れに御控へ下されと、御鉢を持つて内へ這入りますと、如來は阿難尊者を殘して早々御歸還、此處が手で御座る、暫らくあつて難陀は佛の御鉢へ奇麗に食物を盛まして、恭しく玄關へ出て見た處が、佛様は疾の昔御歸還阿難尊者計り立て居る、是はしたり最早や如來は御歸還なされたか、左様なら何とも憚ながら貴僧様に此御鉢を御委託申す、せうぞや佛へ御上げなすつて下されと云ふと、阿難尊者は澄したもので、是はせうした物だ難陀殿、貴様が垢が明ないから佛は御歸還なすつたてないか、其失錯をば隠押して、自分直に取た御鉢を他人に委託やうとは、とんでもない其ても功德になりませうか、罪を恐ろしく思はゞ一所に寺迄行て、佛様に直々御捧げなさるがよからう何て御座ると云はれました、いや早や難陀は大迷惑、去りながら否とも云はれず、左様ならばと阿難尊者と同道して無止如來の處へ御出なさる、則ち尼拘婁精舎と云ふ寺へ参りまして、謹んで御鉢を指上げますと、如來は非常に御歡び遊ばして、是は難陀善來善來、時には値い難ひぞ……早く坊主に成て仕舞へ

仰せられます私に出家しろと、爾さ人が千年萬年生まはしまし、僅かの壽命に録でもない事ばかりして後生を願はないと未來は浮む瀬はないぞや、私は浮ぶ瀬は無くとも拂ひませんせめて二三日なりとも宿へ歸して下さい、妻とも相談して其上の事に致しませう、イ、ヤ此釋迦如來は其妻が氣に入らない、妻子は三界のほだし歸す事は罷ならん、それ其方へ連て行て早く頭を剃て仕舞へ……

如來の御聲が掛りましたから、畏りましたと云ふので、髪を剃ふと云ふ人が難陀の頭へ手を着けますと、さすがは、難陀王様の子丈あつて氣が強い、剃刀を持って居る奴をハツタと睨みれのれ、太い摺古木道心奴、縱令如來の仰せてあらうが予が否だと云ふに誰がなんと云ふものだ、道心もないものに無性に坊主になれ／＼と裏面白くもない、そんなら此國の者を皆坊主にしてもよいか、皆坊主になつたら汝等は領をつるして居さなるまい、其時せうして活て居る、おのれ匹夫の身分として國王同前の我が頭の上に及物三味、何だ不都合千萬な辛蟲奴引込め杯と呵り飛ばしますから、中々尋常のもの、手際に行く様な息子殿でない、开處て釋迦如來が御聞なすつてナゼ汝等は難陀が頭を剃てやらない、イヤもう御阿りなさるから氣味が悪くて、剃れるものではありません、よし／＼そんなら予が剃てやる阿難も來い、畏りましたと、今度は如來と阿難尊者だから小言を云ふことはならず、とう／＼往生づ

くめに頭を剃りこかされて仕舞た、難陀は頻りと頭を撫て廻して、是は頓だ目に遭た此頭のごまを見る、可笑頭つきに成た、どうやら風でも胃そうな、狐に化されて坊主に成たよりも向つまらない、何でもせうかして宅へ歸つて還俗してやりませう、隙間を考へて居ますと、釋迦如來ちやんとその目論見を窺見して居らしやる、そこで寺に居らしやる時は御側で遣はつしやる、外出の時は御供に御連なると云ふ工合に、片時も自由を與へられないから、どうも仕方がない、流石の難陀も溜息計り突て居ました、が時こそ來れて今日は釋尊御弟子衆を殘らず御連れなすつて去處へ御出の筈、留守番は難陀に當つた、此奴能くしたもんだ、何でも今日こそ日頃の願望通り逃てやりませうと、ニコ／＼もので釋尊の御他出を見送り、いでこの間にとろ／＼逃支度に取り掛りました

處へ釋尊が途中から人を御返しなされて難陀に御用を命せられた、其御用と云ふは、一同が歸つた時面や手足を洗ふべき水を汲んで置け、水瓶が幾個も有る筈だから、何へも水を一杯汲んで置けとの御命令、畏りました貴様早く行かつしやいなんだと、イヤサ畏りましたと云ふことサ、そんならと云ふて御使の坊様は出て參ります、難陀は逃る前に置土産に水を汲んで置かずばなるまいと、急々水を汲みました處が、不思議なる哉一つの瓶へ水を一杯汲込むと、先に汲んだ水瓶の水は忽ち傾れて仕舞ふ、是はしたりと又外の瓶へ汲む、一杯に

なると又先に汲んだ瓶がくるりと轉んで頼れて仕舞ふ、どうも果しが無い、難陀は自烈たくて堪らない、是では逃る時期を失ふと云ふものだ、よしよし、是は打捨て、置いて盗人の用が肝要じや、立つ鳥あとを濁さず、難陀とも云はるゝ者が取逃欠落仕候と云はれては濟ない、水を汲まずとも責て戸じまりをして、盗人の這らぬ様にして行ましやうと、それから戸障子を閉様とすると、是れ亦不思議なる哉、此方の戸を閉ると彼方の方が自然に開き、彼方を閉ると此方の方が自然に開く、ハテ不思議な機關の戸障子だ、こんを事をして居ると所詮宅へ歸ることは出来ない、まゝよ泥坊も這らば遣入れ盗まば盗め、予が身上でこんな貧乏寺の二つや三つ直に立て、やるはと、尻引からけて一散に駆け出しました、處が偶と氣付まして、是はぬかつた事をした、此大通を行くと乾度釋尊の御歸りに邂逅すに違ひない、さらば是から道を變へて裏田畝の方から出掛ましやうと、すたゝと參ります、是しさの事を三世了達の佛様が知らずに居られ様か、フム難陀奴裏道の方から逃るは、遠くに居ても能く見へるぞ、さらば予も裏道の方から歸つて喫驚させてやらうと、同じく裏道を御歸りになる、それも知らずに難陀坊主は息を限りと急いだ處が、向ふの方から釋尊の御姿がちらりと見ゆるや否、南無三寶失錯た、はて何したら能からうと鳥驚々々して居る後の方に見上げる計りの大木がある、是こそ究竟の隠れ場所とそ

の大木の蔭に隠れて居ますと、間もなく其大木の前を釋迦如来御通行と同時に、不思議なる哉さばかりの大木、風も何も吹かぬのに根元より忽然抜けて大虚の中へ木を吹上げる、つまらないのは難陀坊主、手持不沙汰で桑原々々夢になれ、と云ふて見ても仕方がない、面を眞赤にして居ますと、やれ、可愛想に色々心遣ひをしまつたな、先づ今日は寺へ歸れとの仰せ、折角逃出したものを、又候寺へ引戻されました、さて釋尊難陀を御召なされて、其方は大切な留守を預りながら、吩咐た水も汲まず諸方を開け放して何故駈出した、大方女房が懇く成てそれ駈出したのだらう違ひあるまい、御意に御座ります、今は何をか隠しましやう晝夜孫陀利がことを思ひくらし、今日は逃様か明日は逃様かと思ふて、漸く今日の御留守を幸ひ駈出しまして御座ります、ア、それは不便な事だが善くない哩、そんなら難陀、ハイ、今から氣晴しに郊外散歩に出掛やう、それは結構で御座ります、是からズーツと品川海晏寺の紅葉を見て川崎屋で中喰に名物の穴子の蒲焼を……ウニヤそんな處ではない、兎も角子と一所に來い面白い處を見せてやる、そんなら何處へなと御供を致しませと云ふて、何處へ御出なさるかと思ふたら、阿那波山と云ふ所へ御出なさりまして、なんとよい景色であらうと仰せられたが、一向面白くない處だから、ハイ宛然丹波の大江山の様な處で御座ります、而も彼所に猿が一疋居ます御覽じませ

成程貴様はよく氣が付た、實は彼の猿を見せ様計りに此處へは連れて來たのだが、氣をつけて見る彼猿は片目だせ、成程片目の猿で御座ります、あんなに穢い猿もあればある物で御座るかとお笑を致しますと、可愛相に爾う笑ふたものでないなせて御座りますあんな穢い片目の猿の癖に而も女猿だ相に御座ります、可笑でなりません、そんなら貴様に聞くことがある哩、なんて御座ります、なんと彼の片目の猿と貴様の女房とは何方が器量が美らう、斯ふ罵られては誰でも腹が立つのは當然で、コハ三世了達の御言とも覺へません、君子に獻言なしあなたは無慮妄の如來に御座らずや、戲談も事にこそよれ、我妻の孫陀利は恐らくは五天竺第一の美人なり、それを何やや畜生の片目猿に比較とは、さても情ない御言葉と、顔色を變へて御恨を申し上げます、是は不覺口が迂つた堪忍してくれろ、其かはり此次は又面白い處を見せやう、まづ今日はこれきりと御歸寺になつた

サテ天上界へ来て見た處が、人間界とは又格別違つた世界だから、さすがの難陀も喫驚する程目を皿の様にして見た處が玉の瓦は擔を並べし耀き、瑠璃の機は空中に響ゆると言ふも實は此處の事てがなあらう、金銀瑠璃珊瑚琥珀は石瓦の如く七珍萬寶を以て飾り立てたる宮殿樓閣切利天に満々たり中々我朝の日光山杯の及ぶ處にあらず、又天人の美麗さ云ふも思かや、丹花の唇芙蓉の眸處ではない、實に餘り奇麗過ぎて躰から光明を放つ程の美人計りて、揚貴妃小町位の女は天人の飯たき姥の中に幾人もある、而して夜晝の商賣と云ふに何にもない、唯甘い物を喰たり笛を吹たり琴を弾いたり飛んだり躍たりして遊ぶ計りが商賣、嘘なら天人の繪を御覽じろ、どの天人でも笙篳篥琴鼓角鼓小鼓を持たない天人は無ではない、斯く天上は樂ばかりで苦がないから、後生願が出来んに依て、未來は餘り良くないと書物に書てある、併し後生は悪くても、なんと斯な處へ生れたら餘り悪くもあるまいがナ、そこでそれ難陀坊主は釋尊に伴られて諸所方々を見物して歩た處が、何處の家造りも今云ふ通り、七珍萬寶の宮殿樓閣だから、近所も耀く計りのありさま、そして一處の宮殿樓閣には、何處にも透き通る様な天子天女が五百人六百人位宛舞ひ遊んで居るだ(天子と云ふは男の天人天女とは天人の女だ)、難陀は肝を潰しました、さても天上界と云ふ處は樂な處だ、予も此な處へ生れて見たい物だと思ひまして、其時計りは孫

陀利の事も安れて仕舞まして、只向を見ますと誠に今迄見た宮殿より一層勝れて立派なのが見える。是は儘か帝釋天王の御居なさる處でもあるかと、行て見た處が、其所には男の天人は一人もなく女計り五百人、而も其五百人の天人の中に主人と思しき天女の、其美しさ中々今迄見た天女とは又各別の水際だそこで、難陀は是程にも美しい天人もあるもの歟、而も此處は餘處と違ふて、女人の天人計り御居なさるから、大方あの主人と見へるのは天帝の奥様かも知れん、何しろ釋尊に御伺ひして見様と、其よし具さに御尋すると、予も其は知らないから手前彼處へ行て彼女に聞て來い、じやと申して此様な形装ては小耻しくて彼處へは行れるものではありませんエ、怪癡な奴だ、誰れ憚る釋迦如來の弟子だと云ふに恐らく三千三天に指一本さすものはない、恐怖せずと彼處の一番奇麗な天人の處へ行て直に聞け、ハイ左様なら思切て聞て見まじやうと、天人の處へ参りまして、私は田舎から見物に参つた者ですが、今迄方々歩いて參た何處の宮殿にも、天子天女が御出なさりますのに、何した事か此處には女中計り御居なさります、其譯を御聞申たいものと尋ねますと、彼主人と覺して端正美妙の天人愛敬こぼる、笑を含んで、お耻しい事ながら御尋に預りまして其譯を申しましたやう、何を隠さう此南閻浮提中天竺に釋迦如來と申す御佛が御座ます、其釋尊の御舍弟に難陀様と申す御人が御座ります、過般御出家なさり

ましたが、其出家の功德に依て御臨終なさると直に此宮殿に御出なさつて、妾と夫婦に御成遊ばす果報が極り切て居ますそれ故此處は妾が召違ひの女子共計り、妾は其難陀様の御出を樂みに、今から待て居るので御座ります、なんだと釋迦如來の弟子の難陀だと、其難陀は乃公だ、ろんならなんと來たが幸ひ今から直に此處に居様ではないか、イナ、爾は参りません、何故かなれば妾は天人君は只の人間、人間と天人とは境界が違ひますから一處には居られません、君若も眞實に妾を不使と思召すなら、早く天竺へ歸て五戒十善を御修行なされ、其五戒十善の功德に依て命終の時には必ず此處へ生じて、其時こそ表面晴れて夫婦となるべし、今は叶ひません其時を待て居ますと云はれまされた、難陀は夢ではないかと嬉しがりまして、轉つまるびつ釋尊の前へ参りまして、彼天人が斯様くと申ました、ム、それが汝は嬉しいか、此處へ生れたい歟、イヤハヤ嬉しい共く早く死たくなりました、是は頗だ事だ、時になんと難陀ヤイ、ハイ何て御座ります、あの天人と汝の女房の孫陀利と何れが器量がよからう、是は恐れ入りました御免下さりませ、なんて篋棒奴御免なさいとはイ、エサ何日か猿を見た時世尊を御恨み申したのが耻しう御座ります、どうしたツけな、ア、どうぞ御嘲弄下さりますなあの天人と孫陀利と比較にはなりません、孫陀利より片目猿の方がよう御座ります、何も申しません早く死て此處へ來た

う御座ります、そんなら孫陀利が事は思ひ切たか、イヤもう思ひ切りましたとも思ひ出すのも穢はしう御座ります、それ聞て安心した、ろんなら彼天人の云ふ通り國へ歸て五戒十善を修行しろと仰せられて、天竺へ連れて御歸りなさりますサアそれからと云ふものは今迄の女房のことは忘れて仕舞てさばかりの蕩樂坊主の難陀尊者殺生、偷盜、邪淫、妄語戒は勿論五戒十善を持ちて、まづ表面は蟲も殺さん様な殊勝な坊様に見へます、だが此五戒十善は眞の戒行でない、何故と云ふに汚はしい切利天に生れて天女と夫婦に成たい計りて、呑たい酒も吞ます、據なしの五戒十善、それよりか戒行を持たない方が餘程氣がさいて居る、サアそれだから弟子兄弟に斥はれまい物か、迦葉尊者を始として舍利弗、目連、須菩提、迦旃延、猫も杓子も難陀と云ふと嫌がる、舍利弗の座つて居る傍へ難陀が行て座る、舍利佛は口もきかずアイト立て仕舞ふ、迦葉の處へ行ても迦旃延の處へ行ても、目連でも須菩提でも難陀を見ると、ア、汚はしいと云ふてアイト立て誰一人難陀と同居するもの更になし、斯ふ斥はれては如何な難陀でも居堪たものではない、でも大方阿難尊者は従弟同士だに依て、よもや外の者の様ではあるまいと思ふて、阿難尊者の處へ行て咄さうとしますと、阿難も同じくアイト座を立て行きに掛る、難陀は急ぎ阿難尊者の裾をとらへて恨めしそに、是れ貴様はどうした物だ餘りだかへ、外の者が斥ふのは他人

と思へば腹も立ないが、予と貴様は現在従弟同士ではないかそれに何ぞや他人と同じ様に、此中は一向口もきかない何した物だと恨みますと、汝未だ心付ずや、汝此頃五戒十善を持つと雖も其汚はしきこと云へからず、考へても見よ出家たるべき者が、天女と夫婦にならんとして持つ處の戒行それが何の役に立つ者だ、尤て描繪の重箱に馬糞も同前だ、汝と一處に座るのは雪隠に住居するも同前だ、其所を離せと唾を吐掛けて拂ひ切て行ます、従弟同士の阿難すら斯だに依て、外に誰一人として難陀を斥はん者はない、難陀も是には手古摺果まして、外聞は悪しハテどうしたらとそれのみ氣にして居ました處が釋尊が亦ある時難陀を御呼になつて、なんと是から氣晴しに地獄に連れて行て見やう氣はない歟、ハイどうか氣味の悪るうな事御座りますな、よいはサ予が付て居るに何も恐い事はない、左様なら御供を致しませう、そんなら、何日かの様に子の法衣をとらまへよ、畏りましたと嚴乎法衣の袖にとらましますと、是れ亦佛の通力で瞬く内に地獄に行た處があら恐ろしや、彼の梵鐘を鐺たてる様な大釜の中へ熱鐵を沸して、其中へ罪人を打込み打込みすること身の毛も栗立ちて、恐ろしなんと云ふ計なく、此様な地獄が幾個もある、釜の中で罪人が咽んで活きもせず死もせず、泣くやら叫ぶやら其聲聞かれたものでない、然る處ふと向ふを見ますと、是

も同じく大きな釜の中へ熱鐵をぐらぐらたぎらして火をきん
 こん焼て居る鬼がある、熱々氣を付て其釜の中を延び上つて
 見ました處が、どうした事か此處には罪人が一人もない、唯
 熱鐵をぐらぐら煮立て、居る計り、若も此中へ罪人を入れた
 から唯一縮みになるだらうと思はれる、そこで難陀は此地獄
 に限りて罪人のないは不思議だ、どうした事かしら、一寸釋
 尊に御伺ひ申して見やうと、釋尊に御尋申すと、予も知らな
 いから貴様一寸彼處へ行てあの鬼に問て見や、エ、何と仰せ
 られます彼鬼にですか是れは御免なませ、エ、怪癡なこと
 を云ふ奴だ、釋迦如來の弟子に誰か何と云ふものだ早く聞て
 見ろ、左様なら思い切て聞て見ましやう、とこは鬼の側
 へ参りまして、又例の通り私は田舎から東京見物ではない地
 獄見物に参りましたもの、なんと外の地獄では何處でもなく
 罪人を簽うてに成さりますが、此處計りに何故罪人が御座り
 ません、嗚御吸てよくはありまじやうが、何した譯でず誰ぞ
 待てども御出なさりますとか尋ねますと、居眠をして居た鬼
 が俄然くはつと目をひき出して、ヲ、其通りく待て居ると
 も罪人の來るのを待ち切て居るわへ、そんなら其罪人は何處
 から参ります、ヲ、云ふて聞かそうが嘆驚するな、此婆婆世
 界南閻浮提の中天竺に釋迦如來と申す御佛御座す、其御佛の
 御弟子に難陀と申す坊主がある、天上へ生せん爲に戒行を持
 つと雖も是れ眞の出家にあらず、さるに依て天の壽命盡るや

本日(は)日蓮上人の御法難會でありまして雨が降るにも拘はら
 ずよくこそ御參詣なされましたさて文永七年九月十二日龍口
 御法難に就ての所感を述べまして共に信心増進し共に恩山の
 一塵徳海の一滴に報ひたいと思ひます
 元來日蓮上人の御一代は世界の英雄傳偉人傳の中に於て最
 も花やかに最も偉大のものであります當時の人々は各自信奉
 して居ります所の宗旨觀念よりして日蓮上人に對し惡感情
 を有て居りましたから彼是れと惡口雜言致しましたけれども
 長足の進歩を以て文明海に輝して居る今日の日本となりまし
 ては決して御法難當時の如き惡思想はありませぬ上人の
 御傳記に就ても正當に解釋する者が多くなりまじしたのは誠に
 慶すべきであります上人の如きは基督の一代マホメットの
 代に比較しますればより勝れて美しくさとがたくさんありま
 す基督は三年にして十字架上の人となりマホメットは最后劍
 を持て立ちました其他各宗の祖師何れも艱難辛苦に遭はれた

十三祖傳篇

九月十二日龍口御法難會

に就て

本多日生師演說
侍者 宏道筆受

(責記者に在り)

否、此熱鐵の中へ眞逆まに引摺り込んで、さんざなぶつて遣
 ふと今から待て居るのだ、其方が名は何と云ふ何處から來た
 と聞きましますから、サア難陀ちつとして居られ様か、やれ免し
 て下され助け舟へ桑原へ南無釋迦牟尼佛へ願くは我を
 助け國に歸して下されと、ワイ、泣き出しますたら釋迦如
 來天竺へ御召連れ歸りになつた
 開處でどうだ難陀天上に生れて此間の天人と夫婦になるか、
 イヤもう御免下さい天人も孫陀利ももう要りませぬ、どうぞ
 彼地獄へ落ちぬ様になさつて下さい、そんなら愈々天上の欲
 求を止めて眞の佛道を修行せよと仰せられて、夫より七日の
 間説法教化し給ふ、難陀是を聴聞して身にしみて修行を辿り
 三明六通自在神力を得て大阿羅漢の悟を開いたとある
 己上は雜寶藏經と云ふ御經の説相であるが、此一個の實歷物
 語の中に如來善巧の權智の御運用が如何に施されあるか、皆
 様どうか唯一通の物語として聞捨てにしないで、よく玩味し
 て我身に引きあて、御會得が願ひたい、無論法華開顯の意味
 によりて、活して我身も、益すべく他人をも利導すべく、種
 々に味つて欲いのである、實はそれ等の指導も此處で篤と談
 したのであるが、餘りに長談義になりましますから一先引き上
 げます、佛陀の智慧の御紹介としては、餘りに首尾の貫徹し
 ないで慚愧に堪へられないが、又充分に説き得る時機もあら
 う程に、何は兎もあれ唱題の修行が肝要に御座ります

であらうけれども日蓮上人と比較にはなりませぬ上人は四個
 度の大難無量の小難に會はれました智慧にては及ばぬとがあ
 るかは知らぬけれども法華經に就ての法難は他に及ぶものな
 らんと仰せられたは實に事實の證明する所でありまします斯く多
 くの御法難の中に於て龍の口は尤も上人の高徳を示すもので
 あります御難の中にも他の御難はのがれ様と思へば或はのが
 れられないともなかつたてあるうけれども龍の口の御難はの
 がるゝに道なかつた政府は暴力を以て上人の頸刎ねんとする
 實に大變なことになつたのであります佐渡巴前の法門
 は佛の爾前經と思し召せの文を以て上人の法門に就て正意と
 傍意を區分するとがありますけれども龍の口に於て頸刎ねら
 れ了んぬとの文より見れば龍の口に正意を顯はし給ふ機會を
 與へたと見てよいのであります、て此御難は確に宗教家とし
 ての活教訓日本民族としての好模範であると思ふ夫れは何で
 あるかと云ふに壓制侮辱迫害の三者に打ち勝たれたからであ
 る上人は佛敎の中にくだらない争ひ計りをして居る者が多く
 佛陀の眞意も殆んど隠れんとする當時の有様を見るに忍び
 なかつた日本國は眞實佛敎の力によりて礎をさすかなければ
 ならぬ然るに今日の如く錯亂腐敗しては到底國家を泰山の安
 きに置くことは出来ぬから議論の方面は日蓮か引受けた必ら
 ずくだらない理屈は捨てさせるをうして佛敎を統一し國家は
 安寧秩序あるの國家たらしめやうとて國家の經綸よりあみ出

された立派なる御主張であつたのである。然るに鎌倉政府には此立派なる日蓮上人の御仕事がわからなかつた。平の左衛門の如きは阿彌陀佛が一番尊きものであるとの信仰の爲に悪感を以て日蓮上人を苦めたのである。彼の松葉が谷に於ける状態は如何です。數十人の部下を従へて上人を取り圍んだ時の夜の光景は實に無慘である。當時禮節を重んじた鎌倉武士としてあり得べからざる所行であつたのであります。御經を取てなげるやら釋迦佛を倒すやら實に目も當てられぬ亂暴狼籍を働いたのである。釋迦教徒にして而も斯の如き動作に出でたるはたしかに野蠻の所行であつたことは明かである。又少輔坊は五の巻を以て頻りに上人の面を打つた。さうして上人を縛り脊せたる馬に乗せて鎌倉中を引廻し昨日迄は堂々と小町の辻に法鼓を打たれた日蓮は非法を行ふ法師なれば今之を龍の口に打首にする。とてさらしあるいたので。此事は實に當時の人としては其辱めに堪へられないこととあります。上人當時の境遇は誠に四面楚歌の聲であつた。僅に上人が由井が濱に行かるゝ道中に一りの婆さんがこれまで御立派な坊さんであると思ふて居つたのに今日の御安はと知らぬ。乍ら涙にくれて居たのである。さて末法萬年の闇を照し玉ふ日蓮上人は脊せたる馬に打乗りて十二日龍の口の頸の坐に御着きなされました。然るに天の不思議なる現象の爲に命に別條なく十三日轉じて依智の郷に御着きなされました。が此侮辱と迫害は人間としては堪へ得べ

からざる處。而も上人は上佛陀の御教勅に答へ下國家を救ふ爲に何等悔ゆることなく何等恐るゝ所なく正義を御主張なされた。此形體上の泰然たる威風と此精神上の確乎不拔の信念とはたしかに宗教家としての活教訓日本民族としての好模範なのである。其態度や剛健其精神や不羈にして正義のある處一歩も譲らず少しも恐るゝ處がなかつた。智者に我義破られずば用ひじとなりとの一語以て上人の信仰を知るべきであります。又上人は八幡に向て諫曉せられました。曾て聞く八幡大菩薩は靈山會上に於て正法の行者を守護すと誓はれしとを然るに正法の行者の壓制侮辱迫害を眼前に見ながら許し玉ふかと。又四條金吾の腹かさきつて御供仕らんとて悲めるを見て決して今始めてなげくべきでない。元より存知の旨なりとて少しもさはぎ玉はずその心如何に平靜にしてその決意如何に堅きかを。見つべし。大迅雷風烈の爲に武士等が畏れ慄ける時上人曰く日蓮は頸切らるゝ身而も泰然たり。汝等は斬る身分なるに如何なれば恐れをなすか。首斬るならば早々斬らないかと仰せられ居る。其沈勇や思ふべく正義信念のある處如何なる迫害に遭ふとも少しも節操を狂ぐるなし。是れ實に武士氣質の手本なり。豈但に鎌倉武士の手本ばかりではない。實に日本人として正義信念節操等の手本であります。北條時宗は世間よりは大層えらい人である。と云はれて居る。それはなんであるか。と言へば蒙古の使を斬つたからだ。と云ふ日蓮上人は之れに就ても一つの御

批評を下して居られます。道理の有る處は之を取り非道理は之をさとし使は使として扱ひ心よく本國へかへしてやるこそよけれ道理も聞かず斬りたるを以てゑらしとはせず。是れを以ても上人が正義の人であつて亦日本人の好模範であることを知らなければならぬ。又宗教家としては道念の發揮護法の本分を示されて居る護法の爲には如何なる苦しみ目にも會はふ道を大切にすることが爲には如何なることも恐れとはしない。悔み恐るゝ様のことがあつてはならぬ。難局に當りたる時分に大低の人は後悔心を起して居るけれども上人は然らず。元より存知の旨なり。日來月來思ひまうけたることは是なり。法は重し身は輕し。云々法難は始めより豫想に入れて居らるゝこと。故法難に會はれた時今更の如く恐れ玉ふことは一度もなし。御弘通の始めよりちやんと御覺悟なさつて居らるゝのである。寸善尺魔と云ふこともあり又魔競はずば正法と知るべからずと申して何の世でも始めは悪人が勝つて居る今日とても頑迷なる田舎村へ行きますと善良なる人々を困らして居る有様が見へます。頑迷黨は善人の主張をさしてあいつは何事にも理屈をぬかすから多人數でいじめてやろうてはなかなかなと随分と無法なことがあるのであります。さりながら、かりそめにも道念あらん者は正義の爲には喰ふに食なく寝ぬるに家なくとて節操を守らねばならぬ。上人は慥に此の實行者であつて法難は始めより覺悟なさつて居ら

れたことも自ら明かでありませす。基督は十字架の上に上らんとする。とき暫らく泣いて居た。後決心して架の上に上れりと彼徒解して云ふ泣くは即ち人情決心せし處は宗教的信念なりと。日蓮上人は之と異なり法を弘めんとし玉ひし。始めに於て捨身決定せられて居た事に當りて泣き悲しみ而して後決心せし基督が西洋人の代表者ならば始めより決心あり難局に當りて泰然自若たる日蓮上人は日本民族の代表である。是れ西洋人と日本人の異なる所。歎此事たる僧俗共に心すべき所であつて國の爲め法の爲一旦決心したることは難局に當りて躊躇する様のことがあつてはならぬ。信仰に入る始めに於て其覺悟がなくてはならぬ。既に信仰の人となつたならば護法愛國の觀念何日も薄らぐべきにあらず。是れ大和民族の特長とすべきであつて。上人は實に其模範的人物である。龍口法難に就て上人の御心中に浮びしことは澤山あります。が要を取て申さば先づ五つありませす。第一に如何したらば御佛の御鴻恩に報ひ得らるゝてあるうかと云ふことである。佛敎の歴史をながめて見ますると艱難に遭ふて御佛の御恩に報ひんとした人は澤山ある。報恩の爲には捨身決定とて幾度生れかはるともかまはない。我不愛身命但惜無上道と言はれた人もある。皆是れ御報恩の爲には壓制暴逆を耐へ忍ばれた金言なのである。今日蓮は如何にして御報恩せん歟。過去の不輕菩薩は法華經の

故に杖木瓦石を蒙りて竺の道生は蘇山に流され法道三藏は面に火印をあてられ師子尊者は頭を刎ねられ天台大師は南三北七にあだまれ傳教大師は六宗に憎まれ玉ふた日蓮何を以てか佛恩を報せんかと思念し玉ひ此大難の爲に報恩者の一人に加はることも出来るかと思召して悦び身に餘ると仰せられた

第二には此法難によりて衆生の救済を全ふし得らるゝと思召したのである其は法華經は立派な教であつて壽量品の御佛は無始久遠劫來常住不滅に在して今尚吾等の頭上に救済の御手を垂れ玉ふて居らるゝあたゝかき慈悲あり活動ある難有御佛である云々も過去よりの事は知れぬから信するものが少ない舍利弗は法華に來つて華光如來の記別を授けられたと云ても未來の授記故之れ又信するものが少ないが今眼前日蓮の行業が勸持品の未來記と合して寸分違はず符節を合すが如くあるを見てこの眼前の證據より推して久遠實成二乗作佛の二大法門も信する様になるであらう眼前の證據あらんずる人の此經を説かば信する人もあるべしと仰せられた聖意感謝に堪へぬこととあります

第三には正法を弘むるの基礎を確立し得ると思召したのである此法華經が後來に弘まるべしや否やに就て天台大師は後五百歳遠沾妙道と云はれ佛は後五百歳中廣宣流布於閻浮提無量闢絶と仰せられてあるが此御文も日蓮の法難によりて意味が強くなつて來る法難に會ふたことが何日迄も人心を動かし法

華經を信する者ができて居る從來難難の徳を慕ひ法難の史によりてなつた信徒が澤山ある今日已後ともそうであらう法華經が此法門に依て活きるのである上人自ら云ふ推量候らん既に眼前也と是れ自ら上行菩薩の再誕たることを示されたのでさき程讀誦致しました神力品の御文を翫味なさい其時に上行等の菩薩大衆に告はく云々闢堅固白法隱沒未法紛亂の時に第一の弟子上行出現し玉ふとあるではないか誰人か及加刀杖數々見擲出の御文に當るものぞ日蓮を措て他にないではないか人打はり悪むとも法重ければ弘まるべしと日本人がまた、ぼんやりして居るからわからぬ上人は實に龍樹天親天台傳教も物かはどの抱負のあつたことを知らねばなりません

第四には日本の天職を全ふし得らるゝことに就て喜び玉ふた即ち立正安國の四字です法立てば國立つ政治法律等は皮相を支配するものであるが心靈を支配するものはなんであるかと云へば宗教道念であつて即ち此法華經の大法でなくてはならぬ國光を世界に輝かすが爲には日本に此大宗教を立て、置けば何れ其中政治家にも眼のさめるやつが出来てくるであらう

我日本の柱とならん等と強盛に主張せられたので從て一闍浮提第一の本尊此國に立つべしとの聖意も判明つて來る又日本が心靈上世界に優れたる位置を占むるに至ることも領會する様になるであらう

第五には敵者を愛す慈悲を示され給ふたのである直接反對

て居る敵に向て慈悲を注がれたことを記憶しなければならぬ平の左衛門や少輔坊は善知識である恩深きものであると仰せられてあります

日蓮上人の人格を窺ふに二面の觀察がある一は本化上行菩薩として二は感情を有つて居らるゝ凡夫てふ方面この二面よりすれば完全に上人を窺ふことが出来る平の左衛門少輔坊の所行に就ては實に不都合なるやつであると思召したのであるしかしさてよ叩くは第五の卷第十三の勸持品であるどうも不思議なことである昔の話に或家の子は父より本を教へらるゝ時ツグの木弓の折を以て始終叩かれた其時叩くツグの木や父を悪んで居たが學問が出来上り立派な人となりて後能く能く考へて見れば悪い父である悪いツグの木であると思ふて居た父やツグの木が有つたればこそ超世の人傑となることが出来たのであるとてこのツグの木を尊重したと云ふが打たるも五の卷打たるべしと説かれたるも五の卷不思議なる未來記の經文なりとて敵者たる平の左衛門や少輔坊をも救はんとと思召して居る彼れに依りて我が道念を練り我行業を増すは即ち彼が善知識なるが故なりとて叩いたのを恩として居られます無法者の爲に法の光りも出て我徳も顯はるゝのであると斯の如く上人は常に敵者を愛するの慈悲心に満ちて居られたのであります宗教家や大和民族は取て以て模範としなければならぬと思ふ

九段坂頭巍然として直立せる大村益次郎の銅像や二重橋外過去を偲ばしむる楠公の銅像や皆是れ其徳を表彰する爲である日蓮上人の國家的觀念の優れて居られたこと古來忠君愛國の烈士に比して如何の懸隔がある日本現代の有様は殊勳だとか勳勞なを與へるのは軍人に限つた様に思ふて居る尤も近頃少々づづは進歩して居るから商業家にも工業家にも醫士乃至婦人にも苟も國家に功勞のある者に對しては効績を顯揚しようとの傾向を生じて來ましたがまだ幼稚なものである日本がもつと進んで來ますれば必らずや

日蓮上人の護法愛國の赤誠に感受して帝國の大殊勳者であることに氣付くであらうと思ふ然る上は千古比類なき此立派なる教訓の紀念として其徳を表彰するに至ること又疑ひなき次第であります上人も既に仰せられてあります此美くしき事蹟を遺して置けば南無日蓮大聖人南無日蓮大聖人とあがむるの時が來るであらうと各々は既に上人の末流を汲み尊き久遠本佛の御手にすがり有難き大法を信じて居らるゝのでありますから宿縁厚かりしを喜び上人法難の教訓に勵まされて益々信心増進して自行化他の行を積み恩山の一塵徳海の一滴に報はなければなりません

南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經

日什上人置文諷誦章卷上

齡八十二老比丘 阪本 日 桓 講述 共 二十四

凡此大曼荼羅者依正不二人法一鉢生佛一如十界互具之大曼荼羅也文此の五句廿九字は法華經本門の本尊の大意を釋したる文て有ます分科を辨すれば此の五句廿九字の文は分て三段初の一句七字は本尊を標し次の三句十三字は正しく本尊の大意を釋し末の一句十字は結釋の文て有ます凡此大曼荼羅者さて曼荼羅とは梵語て此方の語に譯すれば輪圍具足とも亦は功德聚とも稱じます此の曼荼羅の事は曾つて辨したから燕舌しません〇依正不二文此の一句四字は能居の正報の人と所居の依報の土と融妙にして不二なる旨を釋したので有ます其所て依と云ふは依報とて十界の人々の所居の國土の事て有ます正と云ふは正報とて能居の十界の人々の事て有ます此の十界の人々を正報と名付たる事は善因を行すれば正しく善の果報を受け惡因を行すれば正しく惡の果報を受けるから正報と申すて有ます又た依報と名付たるは能居の十界の人の善惡の果報に依て善惡の所居の國土が出来るから依報と申すて有ます所謂佛身の善果報を受けたる人は寂光土と申す善の所居の國土を得ます乃至地獄の人の惡の果報を受けたる者は火血刀の三途の惡の所居の國土を得ます

其所て不二と申すは本地久成の釋尊五眼具足の佛眼を以て法界を徹照するに十界の衆生は悉皆無始無作三身即一の佛なれば三災を離れ四劫を出てたる此土鉢一の本地の娑婆事の寂光の本國土に居住し能居の事の十界の衆生と所居の事の寂光の國土と融妙して不二なる者て有る能居の人を離れたる所居の國土はなし所居の國土を離れて能居の人はなく能居所居身土色心融即融妙にして一鉢なるを依正不二と釋したるて有ます〇人法一鉢文此の一句四字は人の本尊と法の本尊と一鉢不二なる事を釋したる文て有ます人の本尊と云ふは大曼荼羅の左右に羅列したる十界の人々を人の本尊を申し法の本尊とは大曼荼羅の中央に書寫し奉る五字の題目を法の本尊と云ふので有ます偕て一鉢と云ふは上の句の不二の語と同じ意味にて人の本尊と法の本尊とは二つ有る者てはなく不二なる者て有ます其所て人は能證の人とて能く證りたる此の身鉢が人と申す法とは所證の法とて證られたる此の身鉢が法と申すて有ます同じ此の身鉢と云ふ方とさとられる方との不同のみで有るから人法一鉢と申すて有ます〇生佛一如文此の一句四字は更に十界に約して迷悟同一の本尊なる事を釋したる文て有ますさて生とは衆生とて九界の衆生の事て有ます佛とは九界の衆生の頂上に居する佛陀の事て有ます一如とは眞如の如とは異なりて如同とて同一と云ふ詞である上の不二の二字も次の一鉢の二字も此の一如の二字も語は異なれとも意味は同じ

考て不二なるが故に一鉢一鉢なるが故に一如て同じ物を云ふ事てあります是れより生佛一如の所以を辨じて聽せませう久遠實成の釋尊の佛眼を以て法界を徹見するに九界の迷の衆生も佛界の悟の人も悉皆無始無作三身即一事常住の妙法の法鉢にして衆生も佛も同一の妙法不思議の法鉢て有る唯だ心得違があれば本より具したる迷の九界の衆生と成り下り心得違ひなければ衆佛の此の身が色相莊嚴の悟の佛界に立ち昇るので有る實に十界俱に無始無作三身即一の法鉢にて不同はなき者なりと云ふが生佛不二と申すて有ます〇十界互具之大曼荼羅也文此の一句十字は法華經本門の本尊の惣結の文て有ます其所て十界互具と申す法門は法華經一部の中に二ヶ所に御説きになつて有ます述門の方便品と本門の壽量品此の二ヶ所て有ます述門方便品の十界互具は理具の十界互具と申して滅後像法の時代に天台大師此法門に依憑して一部唯述の法華經を弘めて座禪觀心を勸め本門壽量品に於て御説きになつた十界互具は事具の十界互具とて滅後末法の時に我が宗祖大聖人此の法門に依憑して一部唯本の法華經を弘め修行坐臥に信心口唱の題目を勸めたて有ます述門理具の十界互具の法門は暫く置て今は本門事具の十界互具の法門を極めて略し九牛の一毛にも足らざる程であるが辨じて聞かせませう此の法門は開述顯本一部唯本の法華經如來壽量品の文底秘沈の法門にして塔中別付之大士の外徹見する事の出來ぬ難解難入の法

門て有ります依て塔中別付之大士の御言葉を借りて極めて略して辨します此の事の一念の事と云ふものは可見有對色とて我等が肉眼にて能く見らるべきものを事と申す所謂佛の身鉢菩薩の身鉢二乘の身鉢乃至三惡道の身鉢都て十界の衆生及び此の衆生の所居の國土等の眼に觸れ見るべき者を事といふ一念とは佛界の一念那心乃至三惡道の一念那心を一念と云ふ三千と申すは本地久成の釋尊所證の佛眼を以て十方法界を徹見するに十界の一切衆生は悉皆無始無作三身即一事常住にして此の無始無作の佛界の一念に無始無作の佛界を具足し無始無作の九界の一念に無始無作の佛界を備へて十界互に十界を具足したれば十界互具と云ふ十界各々十界を具したれば百界となる此の百界に各々如是相如是性如是體如是力如是作如是因如是緣如是果如是報如是本末究竟等と申す十如是を具足すれば一千の如となる此の一千の如が五陰世間にも具し衆生世間にも具し國土世間にも具してあれば三千種の世間となるから三千と申すて有ります此の十界互具百界千如事の一念三千の妙法は久遠實成の本佛の釋尊開述顯本の法華經本門壽量品文底秘沈の法門にして此の妙法が本門の本尊の法鉢て有ます故に今の諷誦章に十界互具の大曼荼羅也と結釋遊ばしたて有ます其所て此の結釋の上の句に依正不二人法一鉢生佛一如と斯の如く三重に疊上げて本門の本尊を讚歎賞美して御講談になりました所以は久遠實成の釋尊本因本果實修實證して證

得たる事の一念に事の三千を具足したる本門の本尊の法跡たる妙法蓮華經の五字を宣示顯說せんがために三重に疊上げて釋し後に十界互具之大曼荼羅也と結成なされたて有ます

素人問答

六或學人

私は子供の時から何となく自分の境界が力ない様に思ひまして、何か尊いものに自分の身の上を御任せ申して安らかに一生を送りたいと云ふ考がありました、それから稻荷様に參詣したり、辨天様や毘沙門様金比羅様、觀音菩薩に普賢様、其他種々の神佛に心願をいたしました、此通り様々の信心をいたしましたが、余り澤山に尊いものが多いのですから、とても心が運びきれないのであります、最初は自分の力の足りない淺草な境界を案じられて、種々の信心をいたしましたが今度は尊い拜むものが多い爲に信心がし切れないので、却て心配が出て來ました、そこで自分も種々尊い神佛の中で、一ばん尊いものをつきめて、信心をいたしたいと思ひましたところが、私の友達のお申しすには、法華宗の御本尊を信心すれば一番結構である、法華宗の御本尊には、佛様も神様も菩薩様も、其他あらゆる尊いものは残らず祭であるから、一

つの御本尊で皆揃つて居るゆゑ一ばん有難い譯である、南無妙法蓮華經の御側に、一切の神佛が集つて居られて、御題目の光りて働いて御いてなされるのであるから、本當の生きた働きをなさると言ふことである、それだからして、外の神社佛閣は神佛を祭つてあつては參詣する必要はない、參詣したからとても、金や木でこしらつた人形と同じ事で、魂がないから何の利益もない、實に利益がないばかりでなく、謗法といつて不忠不孝の罪よりも重いのである、因て法華宗の本尊に信心をさめた以上は、外の方へ手を合せると罰が中ると云ふことを聞きました、それから私も種々考へた後、澤山の神佛に信心はしきれないから、一層の事法華宗の本尊に信心を定めることにいたしました、そこで法華宗の本尊を拜んで、一切御任せし安心して居りましたが、此頃一つの疑が起つて來ました、それは何であるかと云ふに、法華宗の本尊に御題目もあれば、御釋迦様も多寶様もある、上行無邊行淨行安立行等の菩薩もある、文殊普賢彌勒藥王舍利弗目連三光四天王等種々の尊いものが并べてある、法華宗信心の始めに於ては、唯一の本尊と心得て居りましたが、此頃はさまざまの尊いものがありまますから、御題目を稱へながら右を向ひたり左を向ひたり上を見たり下を見たりして、一つの本尊の様な氣持がいたしません、多神教とやら申す本尊の様に考へられる、是で折角法華宗の信心に入りましても、何となく心が八方に散

つて、感應御利益が薄ひ様な氣持がいたします、特に法華宗では本尊様は一つであると教へて居り乍ら、やれ妙見うれ鬼子母神、毘沙門だの清正公だの、又稻荷辨天など、色々なものを祭居て、法華勸請であれば何でもかまはぬと云ひます、御本尊は一であると云ふ方が本當なら、何を拜むてもかまはぬと云ふのが虚偽であるし、何を拜むてもかまはぬなら本尊が一と云へませぬ、二心あれば謗法と云ひながら、十や二十にも心の分かれるやうになつて居ります、折角私も御題目を稱へる仲間入をした因縁もありますから、どふか私の疑を晴らして頂きたい、

貴君はよく御尋ねになりました、私もあなたと同様の感じがありましたが、此の頃善智識にあひまして、信心のまごつく様なことはありません、何でも經卷相承とか申しまして法華經と御妙判を指南とし、自分の信心を極めるのが大事であります

御祖師様が大難四回小難數知れず、命を捧げて御弘め遊ばしたのには、三大秘法と申して、本尊と戒壇と題目であります、本尊は信心の目的で、題目は信心修業、戒壇は本尊と修業の結び付けの作法であります、ですから信心の目的で云へば唯一の本尊より外にありません、本尊がいくつもある様では、安心のさまる筈はありません、若しも或る法華宗の人が云ふ様に、法華勸請をすれば何を拜んでも差支ひないと云ふのが

本當ならば、御祖師様が大難を受ける様な事が決して無いのであります、命懸けて御弘遊ばした唯一の本尊を疎かにして信心を二三にする様では、祖師の御慈悲に背くのみならず、謗法と云ふ罪になるのであります、大体法華勸請などと云ふ考へが、どう云ふ所に基いて起るか申すに、自分が御題目の問屋のつもりでおろしをする量見があるからであります、御題目は自分が受け持つのであると云ふ事を忘れて、自分が御題目の製造屋のつもりで居るからであります、是れは受戒作法の上に顯れたる御本尊と云ふ事を知れば、此の様な間違は起りませぬ、受戒作法とは戒法たる南無妙法蓮華經を受け持つ作法と云ふ事でありまます、此の受戒式には必ず三師一證一件と云ふ規定があるのであります、三師とは一には戒師として、戒法の妙法を授與なさる久遠實成の釋迦牟尼佛であります、二には阿闍利として、紹介の任に當る多寶如來であります、三には教授として、妙法を受持するに就ての一切の心得を教授なさる本化上行等の菩薩であります、一證とは妙法を受持する場合の保證人、即ち十方分身の諸佛であります、一件とは同行の人と申して妙法を受持せし先輩たる文殊普賢等の人々であります、我等が受戒する場合に四方を警戒する役目は四天王等であります、此の受戒作法の状態を名づけて、曼荼羅輪圓具足とも又本尊とも云ふのであります、本尊を拜する場合に斯の如き心得を持つて居れば、皆各々役目が分

擔せられてあつて、決して多神教なせと云ふ事はないのでありませぬ、我等が妙法を受け持つ場合に、威儀堂々たる有様であるかと思へば、誠に恐縮の譯であつて、感涙に咽ふの外はありませぬ、自分共が佛になる道は、唯だ南無妙法蓮華經でありませぬ、妙法は成佛の種でありませぬ、妙法以外の諸佛諸菩薩等の名號は何の役に立ちませぬ、若しも妙法の外に成佛の道がある様に考へたら大誤謬を生ずると共に、知らず識らず大罪を造る事になります、此の尊き妙法は何人より授かるかと云ふに、全く久遠の本佛より外にないのであります、斯く申しますと、御釋迦様は三千年の昔死んで仕舞つた人である、死人に口なしの御釋迦様から授かるとは奇怪千萬と思召か知りませぬが、死んだ御釋迦様は小乗の佛であつて、法華經の佛ではない、法華經の佛は、本來生死の外に超越し常に大慈悲に住して、三世十方に應現なさるのであります、詞を換へて云へば時として在さざるなく、所として在さざるなく、常住の妙用を垂れ給ふ、此の本佛を見奉る事が出来なると云ふのは、自分の心得が顛倒して居るからであります、若し信仰の水澄まば本佛の月影必らず浮ぶのであります、只今も申す通り、妙法を受持する場合に、必らず本佛との感應と云ふものがあるのであります、若し此の感應なくして唯自分勝手に題目を唱へても、夫れは空題目であつて成佛の種とはなりません、故に眞實御題目を受持すると云ふ事は容易な

らん事である、夫れを口から出仕かせに御題目を吐き出して夫れで法華の行者であると高慢願するのには憫然の至りである其れを平氣で居る輩が多いから、御開山日什上人が受持分絶たりと御嘆息なされた譯である、本佛と感應ある題目は、眞に喜ばしき譯であるから、盲龜の浮木に値ふの思ひをせねばである、此の發心は、本化の菩薩の再身たる教授の任に在ます、日蓮上人の教訓により、生死無常の境遇をはかなみ、又本佛の常住にましまして大慈大悲の御心をかけさせ給ふを慕ひ此の本佛より賜はる妙法の功德の廣大なる事を信じ、又妙法を受持すれば成佛疑ひなきを以て、此の信仰の神聖を汚さざる事等の心得を聽聞するのであります、愈々自分の覺悟が極まれば、多寶如來が紹介者となりて、本佛に御取りつき下され、十方の諸佛にも保證人となることを依頼せられ、猶同行の人たる文殊普賢等の先輩者にも紹介終り、そこで始めて自誓自戒して、今身より佛身に至るまで能く持ち奉る南無妙法蓮華經と信念口唱するのであります、此の場合に本佛は響の聲に應ずるが如く、清水に月の映るが如く、微妙莊嚴の御姿を以て、多寶如來十方分身の諸佛、及び文殊以下の同行の人と俱に應現ましますのであります、此の有様をうつしたのが御曼荼羅であります、何と有り難い譯ではありませぬが、我等も妙法五字の光明に照らされて本尊の中に這入るのであ

ります、此の外にも本尊に對する尊き説き明しは澤山あります、すけれ共此の一義は一番あなたの疑ひを晴らすに好からうと思ひます

自我偈に、一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず、時に我及び衆僧に俱に靈鷲山に出づ

分別功德品に、若し善男子善女人あつて、我壽命の長遠なるを説くを聞いて、深心に信解せば、則ち爲れ佛常に眷屬福山に(靈鷲山)に在つて、大菩薩諸の聲聞衆の圍繞せると共に説法するを見る

觀心本尊抄に本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出てたる常住の淨土なり、佛既に過去にも滅せず未來にも生じ給はず、所化以て同体なり、此れ即ち已心の三千具足三種の世間なり

又曰く釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り與へ給ふなり南無妙法蓮華經



公 開 状

聖日蓮の文學觀を讀む

小泉要智氏の近業
近時文壇の一大偉觀

古 定 不 新

日蓮上人の文學的方面を紹介したるはかく申す小生が最初の皮さりに御座候小生は最初御書全帙が鎌倉文學として取扱はるべきものなることを唱へ之を鎌倉文學として見たる御書研究の趣味を顯じて田中智學氏の主幹になる妙宗誌上に掲載し同時に其關係せる統一雜誌上にも種々御振舞御書の文學的價值を論じたること有之候

然るに日宗諸派の學者と稱せる徒輩は却て是を閑事業視し一顧を拂はで見のがし候様に覺へ申候然るに世の青年宗教家に於て少しく文學的詩的の趣味を解し宗義と稱する方面へも信仰と稱する方面へも又は布教傳道の方面へも少しく詩的趣味の文學趣味をましへて衆生教化の實を擧んと苦心せるものは日蓮上人の文學的詩的性格を研究するに熱心なりしと見へ今日卒然として小泉要智氏は日蓮上人の文學觀を研究せられて之を書肆須原厄より公にせらる吾人は之を手にして又一人の知己を得たる心地し聖祖の文學的詩的方面を研究するものほひろき天下に於て小生一人と思ひしに又一人の新研究者現れたるを多とし歡びに堪へず候

小泉氏は地上派の新式學者にして混沌たる日宗教學界に於て優に青年宗教家の巨頭たるもの也其學才の優秀なる其文致の奇抜奔放なる明治文壇三傑の一人たる故齋藤藤雨と相伯仲するの文學者也彼藤雨にして一たび小泉氏の文致を知りしならんには氏をして永く池上の山奥にひっこましましめずして必ずや

其文致想泉に緑雨の新らしき血をふきこみて中央の文壇に其雄を唱へしめしならん氏の如きは永く池上あたりの山奥にひつこみて其奇才を寒煙枯草の中に没するは明治文學發達の爲に吾人の大に遺憾とする處也

さもあらはあれ一代の傑人たる日蓮の文學的方面を此肉欲文學隆盛の文壇に提供して敢て其空氣を一洗せんと試みたる氏の意氣や壯大雄偉といはざる可らず今や日宗といはず各宗の青年輩手に經卷を繕ひて口に清元端歌をうなり世の實業式の青年にも劣れる行働の多々あるが中に氏が池上の寒煙に世の塵のそれをへだて、銳意此大文學を研究したるは日蓮宗發達史上特に大書すべきこと、いはざる可らず吾人は日宗の先輩と自稱せる徒輩が徒らに散漫たる空論をうなるをさけて此一青年が半世の心血を注きたる大研究に注意を拂はんことを希望するもの也

全篇二百七八十頁の長篇讀み去つて毫も滯滞なし達筆といはんよりはむしろ靈筆也文字洗練にして想を宿すこと又高遠也最後の一章たる日蓮上人の國家觀を論ずる處氏が研究の苦心を見るべし日蓮の宗教を國家性なりといふは曲學阿世の徒の言にして眞乎宗教の意義を探討したるものは宗教が悉く普偏性世界性人類性なることを主張す小泉氏の論も又茲に歸着せり日蓮の宗教は國民性ならずして人類性也局部性ならずして普偏性なり國家性ならずして世界性なり氏は此義をとこまても主張して彼國家主戰の日蓮を排し世界主義の日蓮を鼓吹したり是氏が一大見識にして又氏が日蓮門下の青年宗教徒として録々の名ある所以也聞く氏は此日蓮の國家主義を打破したる爲に頑迷なる學者の攻撃を受け近日彼宗の宗學者會議に於ては氏の言働を是非すべしと傳ふとよし機會は來れり若此會議にして愚昧なる決議をなさば吾人は一齋に筆を揃へて彼等宗典學者の頑頭を打破せん小泉氏たるもの意を強ふして可なり

各資財を抛つて、この目的に進行せらるゝと云ふことである予は千葉縣地方の寺院の状態を知つて居る一人であるが、生活として樂天的の觀を持つて居らぬのである、然るに該地方の僧侶の奮發せらるゝことを傳聞して感激に絶へぬのであるされば東京關西及び各地方の僧侶方も出金方法は處によりてかはるであらうが、千葉縣の僧侶諸君に對して顔色なき様のことがあつてはならぬのである、東西相應じ中外一致して、この目的の彼岸に達せねばならぬのである

人生五十年七十古來稀れなりと云ふてはなにか、御互に淨世の樂に夢みて居た處が、臨終の夕に至つて過きにし方を眺むれば未來の土産になるものは鮮矣ことなる、何をなしても一生は一生である樂しむも苦しむもホノノ一刹那のことであつて何でもないのである、苦樂共に一生なら、苦しむのも法の爲、樂しむのも法の爲、上求菩提下化衆生の所作に出てたならば、必ず聖祖の御本意にも叶ひ、靈山にましまし、慈悲尊き久遠實成の御佛の前に生れて、即疾頓成の利益を受くることが出来るであらう、まして出家沙門の身としては、五欲の境を離脱して、只偏に佛事を成ずることなれば、説法教化の半面の地盤なる財團に精力を注ぐのは、誠にたのしきことと思ふ

國家の獨立を維持し、國家の發展をなすには、人物の必要と共に財力が伴はねばならぬのである、夫れと同じく宗團の目的を完全に現實せしむるには、必ず人物と財力を要するの固より當然の譯である、佛陀か布施と云ふことを二分して、法施財施と並立して説かれたのは、實に敬服すべき譯である祖師か御妙判に檀越より種々の施物を受けられたる場合に、經典等の事例を引き、其の功德を稱揚せられてある點から見ても、施物の必要條件なることか分る、釋迦已前の教は謗法者之首を斷つ、釋迦已後の教は謗法者に施を斷てよ、と迄云ふてある、して見ると在家の人々か、教學財團と云ふ淨業

何はともあれ彼等の傳道に力なく彼等の教化にあきたらぬ今の社會に雄大華麗なる筆に大日蓮の壯烈なる意氣をつゝみて明治文壇に打て出でたるは國家隆興の爲に大慶に堪へず嗚呼聖日蓮の文學觀一卷萬燈法華の徒と御經坊主の爲に益せずして却て明治文學に一味の清氣靈氣を傳へ他日國家大文學の起りて東洋の首都に大日本文學殿の建設せられたる時其名譽ある紀念帳に著者小泉要智氏の名と本書の名とは永く染め出されんや必せり

教學財團に就て (其三)

釋 天 順

僧侶か興學布教等の目的に向つて突進すると云ふことは、元より其の本分であるけれども、今回の財團に就て和衷協同せらるゝ状態と云ふものは、實に驚くべき程である、近き過去に於ては、大僧正とか何とか相當の位置を持つて居た人々は、互に一城廓を築き其の間の連絡關係と云ふものは殆どないやうな有様であつた、然るに今回の財團に就ては、互に異体同心の思をなし、山岬日隆錦織日航中田日蓮等の各大僧正方は各其の分擔を定め、東奔西馳磨擦かならずと云ふことである何れも御老体の身でありながら、この淨業の成効について、是非好結果を奏したいとの御考に承る、財を集ると云へはつゝあらぬ様であるけれども、其の財の活動がやがて、宗祖、立教の精神を發揮することになるとすれば、所作佛事の聖訓を實行せらるゝのである、又千葉縣地方の僧侶方も、此の老人の意氣に感ずると云ふよりも夫れ以上に、老人に心配かけてはすまぬと云ふ大菩提心から、檀信徒の贊助を請ふと同時に

に贊同して、財施をなすと云ふことは、佛教の生命をつなぐ様な譯である、否管に生命をつなぐ斗りてなく、佛教の活動をして廣大無邊ならしむるの結果を見るのである、夫れを在家の人が心得遠をして、佛法を弘めるのは僧侶の役である、在家は關せずと云ふやうなる考があつたら、所謂二乘根性と云ふて、他を利する心のないものは、佛になることは覺束ない、佛陀は自覺覺他覺行圓滿である、自の利益を得るか如くに他をも利せんと考か大切である、僧侶は道を弘め、在家は財を施すのである、相互相待して始て大活動をなし得るのである、隨力演説は僧のふむべき道であつて、隨力財施は在家の盡すべき道である、佛在世に長者の萬燈よりも、貧女の一燈と云ふ事例がある、されは如何に數萬の財を施しても、至誠菩提心より突發したのでなければ功德にならぬ、例へ一錢なりとも一心渴仰の余波茲に出でたりとすれば佛意に叶ふこととなる、長者は名聞を忘れて巨萬を喜捨し、貧女は一髮の力を添ゆる覺悟を要するのである、僧侶法を説かず在家施をなさずんば、佛陀の大慈悲は没却して衆生の罪業を救ふ期はないのである、願くは僧俗異体同心以て本財團の成効を速にし以て一天四海皆飯妙法の大理想を、一日も早く御互存命中に見んことを希望して止まらるのであります

雜 報

●顯本法華宗東部講習會 秋高うして氣澄み燈火稍や親むべく簡編卷舒すべきの好時季をとり、顯本法華宗東部講習會は本月一日より七日間山水眺望絶佳なる千葉縣東金町安國山西福寺に開かる、參會せる者東部各教區布教師及寺院住職五十餘名、講師大僧正阪本日桓師は「十法界抄」大僧正錦織日航師は「法華經講義(大僧正本多日生師著)」に對する批評大僧正

小林日師は「吾祖立宗之基礎」大僧正本多日師は「本尊に關する重要教義」に就き各々獨特の講演あり、外に科外講師として僧正今成乾隨師の「論理學」僧正野口義禪師の「日宗歷史」の講演あり、趣味津々金玉の名論普く法益に潤へり、七日閉會式舉行、錦織大僧正は導師として會員一同法樂、終つて同師の訓誡的談話あり、廣部永真君は會員一同に代つて謝辭を述べ、山岡委員の挨拶あり、其れより一同食堂に於て酒宴、酒酣にして墨墨玄君の所感演説、倉上隆榮君の漢詩朗吟、増田聖道君の吾人本分の演説及閣浮統一の新體詩朗吟あり、其他諸氏の談論彌々出て彌々興し各々歡をつくし、和氣露々の中に顯本法華宗萬歳、講習會萬歳を三唱し正午十二時目出度散會を告げぬ、

因に記す諸講師の講演筆記は逐次掲載するの都合なれば茲に一言す、尙講習會中東金町佛教青年會の請ひに依り本漸寺に於て數夜に亘れる本多師の「祖書に顯はれたる佛陀觀」の大演説速記も逐次掲載するの都合なれば序ながら一言す(天齋生) ●九州に於ける本宗對富士派法論 事件に關しては同地開國新聞所報の如くなるが愈兩派とも火の手熾にして兩虎鬪の感あり顯本法華宗に於ては法論規約締結委員として淺見林惠平岡藤助平岡保太郎の三氏を選定し十一月廿八日を以て久留米市橋原町翠香園に兩派の委員會合することに決したり顯本法華宗より提出する規約中には法論敗者は僧俗とも勝者に對して即日改宗するの條項もある由(團員某報) ●久留米開國新聞の記事左の如し ●顯本法華宗對富士派法論事件 曩に本紙に記載したる顯本法華宗對富士派法論事件に關し顯本法華宗より富士派へ送りたる申込書は左の如し

拜啓今春以來本宗信徒平岡藤助氏と貴派檀家向井市次相川忠吾御兩氏との間に於て宗義の問題に付き衝突致候趣聞及候故今回貴派の宗義たる左の條々に付き討論致し正邪相決

場に出迎ひ夫れより同所青木旅館に休息の後ち住職及有志者と腕車を列ねて本泰寺に着同日及二日は法論の件に關し總代人と熟議の上、富士派に對し法論申込書を送付す(申込書は開國新聞所載の通り)翌三日筑前國朝倉郡馬田村下浦に至り同地信徒井上房太郎氏宅に於て同夜説教四日同家に於て晝夜説教五日同所井上福太郎氏宅に於て説教六日は筑後國三井郡本郷村伊田中三太郎氏宅に於て説教七日は同村中畑に於て晝は平城末吉氏宅に於て説教夜は同所重松治市氏宅に於て説教八日は同郡大堰村菅野安達貞平氏宅に於て晝夜説教何れの地も參詣人頗る多く參聽者中には他宗派の信徒も多く説教後は唱題するものさへ見受たり是れにて筑前國方面の布教滿了せしを以て九日同地を發し久留米本泰寺に歸る十一十二日の兩日は本泰寺に於て晝夜説教參詣頗る多く十一日夜の如きは投石の暴行を爲すものさへあり是れ邪徒の行爲ならん翌十三日は同寺に於て施餓鬼大法會を修行す是れより先き小生は妙信寺總代より無止き用務の爲め歸寺を促し來りし故へ暫く九州の布教を中止し法論の總ての事務は委員に托し十五日午後本泰寺を發し歸途に就く此の日停車場に見送るもの數十名なり(山本通辯報)

美話記

予明治三十四年三月宗務當局者の委囑を受け本宗の末寺京都市五條日經入上の開基たる上行寺の財産整理に干與すること茲に年あり就中専務京都に寓すること三ヶ年余其間魔事の障礙を受くること屢々ありしも屈せず遂に姫陽中村祐七氏の助力を得て本年七月全く整頓せり然して適々九月廿四日該寺の檀中總代池田安兵衛氏殘務の協議あつて予の寓所に訪る談本宗の隆盛のことに及び財團設立者の信念且つ出資の美舉に至る池田氏感して即時金一百圓の寄附行爲を發念せらる然かも崩納は不時災害又は時運圖かるべからずとて即金納附なり予の整理中池田氏は中傷者の爲め予の意思を誤解せられ議の衝

度候
一造佛廣獄論は破佛法の外道説にして佛祖違背の大謗法と認む
二日蓮本佛論は本末顛倒の大邪見にして教外別傳の魔説と認む
右二ヶ條目公開問答致度候間對論者御決定の上本日夕刻迄に諾否御回答相成度候也
顯本法華宗本泰寺住職 吉塚通榮

三十九年十月二日
日蓮宗富士派露妙寺住職 鈴木慈謙 殿
右に對する回答
拜啓御申込の討論の件正に承諾仕候小生目下當地に出張候間不日歸寺之上定約爲取換其他正格之手續可致右御回答申上候也
明治卅九年十月五日

遠賀郡水卷村富士派教會 所に於て露妙寺住職 鈴木慈謙
久留米市寺町本泰寺住職 吉塚通榮 殿
右之回答に接したるを以て顯本法華宗側にては委員撰定規約締結の上不日法論決行の由
●布教通信 生は本年九月廿九日九州信徒の招待に依り同日午前自坊を出發す途中姫路驛に下車野老師を訪ひ九州の富士派との法論事件に關し協議を遂げ午後同地を發し岡山驛に下車能仁氏を訪ひ同所は一泊同夜は能仁氏と法論の論題等種々の協議を爲し翌三十日午後同所を出發し十月一日午前久留米驛に着すれば本泰寺住職及檀家總代人其他男女諸中外有志

突することありしも斯は唯法の爲なりし其果是に顯著たり池田氏か寄附行爲の金員は少に似たりと雖とも京都に於て教學財團へ寄附者の嚆矢たり予感窮まつて此美事を略記しぬ
明治三十九年九月 見榮るする稻に視るたる旅人かな 在京郡 村上貞藏

公告

當山儀今回振替貯金口座ニ加入シ左ノ通り
口座番號相定メラレ候ニ付キ教學財團寄附
金拂込ノ義ハ該口座へ拂込可相成候也

加入者名	京都府上京區榎木町 總本山妙滿寺
口座番號	第四三六九番

拂込用紙ハ最寄郵便局ニ請求セラルベシ
右公告ス
明治卅九年十月 總本山妙滿寺

振替貯金口座番號

第一二二八番	東京府荏原郡品川町元南品川五丁目 顯本法華宗宗務應教務部
第一二二九番	東京市淺草區南松山町四十五番地 統

文學博士 三宅雄次郎君序 (既製發賣)
大僧正 本多日生師著

法華經講義

和裝鉄入全八冊 洋裝背皮全三冊 正價金四圓
郵税金三十錢 臺灣二十錢 贈

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也
古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所 東京市淺草區南松山町 泰一團
東京市橋南傳馬町三丁目 森江文書社
全 麻布飯倉五丁目 淺倉屋書院
全 淺草廣小路 日宗新光
東京府荏原郡池上村 法
京都寺町二條妙滿寺中

文學博士 姉崎正治君序 (既製發賣)
大僧正 本多日生師編

聖語錄

洋裝九百頁 特製金壹圓拾錢目下品切
並製金七十五錢 郵税金拾錢

法華は佛教の綜合歸一を宣し、聖祖は各宗の積極統一を唱へたるもの、その教義の深遠に且多方面にして、眞意を正明に會得し難きは、實に宗の内外に於ける古今の嘆聲なりき。本書は法華の三部及祖書全集に就て、之を整然たる組織の下に類聚編成せられたるもの、研究の士も布教者も、信徒も必ず一讀すべき日宗の聖典なり

大賣捌所 東京市京橋區南傳馬町 須原屋
京都古門前繩手三吉町 村上貞藏
大坂東區心齋橋安土町北 加々善書店
横濱市蓬萊町一ノ三 統一新聞社
岡山市下ノ町 久城茂太郎
全 市上ノ町

日蓮宗大學同窓會

明治三十九年講義錄 菊版二百五十頁
夏季講習會定價金參拾錢

- 目次
- 觀心本尊抄問題 日蓮宗大學教頭 正 本間海解
 - 祖書の對照研究 顯本法華宗管長 大僧正 本多日生
 - 宗門史話 立正安國會長 妙宗主筆 田中智學
 - 佛教時代印度の社會狀態 文學博士 姉崎正治
 - 最近歐洲哲學思想の變遷 文學士 小林一郎
 - 宗教家と文學 マスター、オペアーツ 畑 功
 - 英米に於ける慈善制度 マスター、オペアーツ 田中一貞
- 來十一月十日發行(大崎學報別刊)

發行所

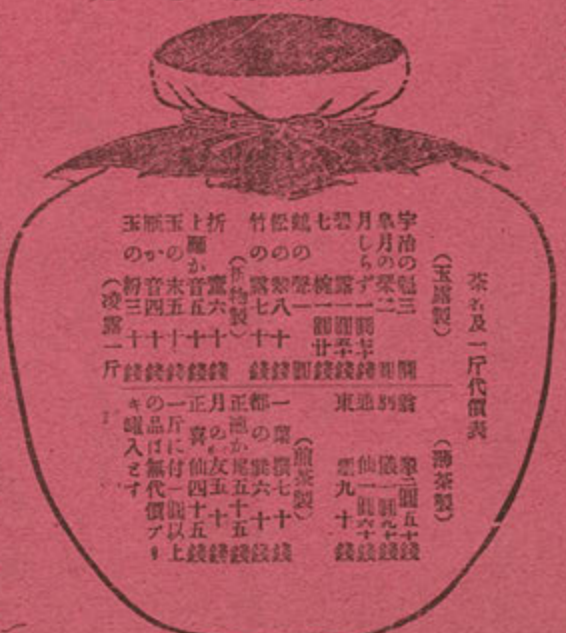
東京府荏原郡大崎村
日蓮宗大學同窓會文學部

賣捌所

東京府荏原郡傳馬町三ノ五 須原屋書店
東京府麻布區飯倉五丁目 森江書店

眞正字治茶

元 造 製 茶 治 字



秋期御見舞の好適品

▼粗製の類似廣告あり御注意
弊室製品の眞價に就ては世既に定論あり此際一層の奮勵を以て平素の御高底に酬いんと欲す左記手續により續々御注文を賜へ

(一)表中の茶名と斤數御通知あらば直に送品す(二)代金は前金又は小包郵便代金引替とす(三)選信者振替貯金口座に加入しあるに依りて注文の節は送費弊室にても最便利に且安全なる御注文の御申越次第何れに御負擔す但清韓臺灣は小包一個に付金廿錢の増税だけ山城經喜郡振替貯金口座一〇〇四番草内村

古川專太郎

